

氏名（本籍地）	すずき ひろのり 鈴木 敬了
学位の種類	博士（情報科学）
学位記番号	情博第359号
学位授与年月日	平成18年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科、専攻	東北大学大学院情報科学研究科（博士課程）人間社会情報科学専攻
学位論文題目	Word Order Variation and Determinants in Old English（古英語の語順の多様性と決定要因）
論文審査委員	（主査）東北大学教授 福地 肇 東北大学教授 竹内 修身 東北大学教授 関本英太郎 東北大学助教授 小川 芳樹 東北大学助教授 西田 光一

論文内容の要旨

第1章 序論

英語史上の語順の変化に関して伝統的に格語尾の消失(水平化)が語順の自由度を制限し結果として語順の固定化(SOVからSVO化)を招いたとする主張が Baugh and Cable (1993)等に見られる。一方 Shores (1971)は *Peterborough Chronicle* 1122-1154 を調査し、格の組織が崩れているにもかかわらず語順の多様性があることを指摘している。Bean (1983)では *Anglo-Saxon Chronicle* の各時代を分析し、格の崩れが語順の固定化の原因とする伝統的主張が述べられている。Bean の研究方法はその後 Denison (1987)によって批判された。主節に *and/ac* 節を含むべきではないこと、また「要素の重さ」(‘heaviness’)による語順決定要因が考慮されていないという批判である。語順の多様性に関して Fries (1940)は語順が完全に自由であるとし、その後 Shannon (1964), Andrew (1966), Brown (1979)等の研究により語順には高い規則性があると修正された。

語順の多様性に働く原理として Kohonen (1978, 1982)は Halliday (1967)の情報構造を用い‘givenness’(情報度)および‘heaviness’(構成要素の長さ)が目的語の位置の要因であるとした。情報度に関しては Halliday (1967)が‘given/new’の2分法を提案しているが、Chafe (1976, 1987)はそれに異を唱え‘given,’‘new,’‘accessible’の3分法を用いた心理モデルを提案している。拙論 Suzuki (1992a, 1992b)では二つの理論の比較し、Chafe の理論の利点を指摘したが、古英語の音韻論的情報や当時の人々の共有知識は十分に解明されているわけではなく分類上あいまいなカテゴリーを設定しなければならない問題点を含んでいる。したがって本研究では‘givenness’よりも、より客観的尺度として‘heaviness’に焦点をあてその作用を調査する。

第2章 古英語における語順の多様性と格表示のあいまいさ

古英語における語順の多様性と格のあいまいさを調査し、格の消失が語順の固定化を招いたとする伝統的主張の有効性を検討した。表(1)、(2)は古英語における格の表示と語順の多様性の関係を調査したものである。この表から主語(S)、目的語(O)の格表示があいまいな節においても語順の多様性が見られることがわかる。用例(2)において主語 *hi* ‘they’は対格 *hi* ‘them’と同形であり、また目的語の *hiera scipu* ‘their ships’も対格と同形であり、あいまいな格の表示となっている。

(1) 初期古英語散文パーカー年代記 892 年-924 年における格と語順の多様性

<i>Parker</i>	S, O 共に 格表示あり	S, O の区 別なし	O のみ 格表示なし	S のみ 格表示なし	計
SVO	2	8	4	8	22
SOV	4	17	10	10	41
VSO	8	9	14	7	38
VOS	0	1	0	1	2
OSV	0	3	1	0	4
OVS	0	0	0	3	3
計	14 13%	38 35%	29 26%	29 26%	110 100%

(2) SVO 語順

on þa ea hi tugon up hiera scipu op þone weald.
to the river they rowed up their ships until the weald
iiii- mila fram þæm mupan utewardum
four miles from the mouth outside
'they rowed their ships up as far as the forest, four miles from the entrance to the
estuary'
(893. 84/9-11)

表(3)は後期古英語散文ピーターバラ年代記 1070 年-1121 年における格と語順の多様性の関係を示している。パーカー年代記と同様、格表示があいまいな主語と目的語を含む節において可能な語順がすべて現われている。

(3) 後期古英語散文ピーターバラ年代記 1070 年-1121 年における格と語順の多様性

Text A	S, O 共に 格表示あり	S, O の区別 なし	O のみ 格表示なし	S のみ 格表示なし	計
SVO	21	35	54	13	123
SOV	24	26	49	12	111
VSO	10	5	22	0	37
VOS	0	1	0	0	1
OSV	6	4	9	3	22
OVS	3	3	1	6	13
計	64 21%	74 24%	135 44%	34 11%	307 100%

同様に Shores は初期中英語散文 *Peterborough Chronicle* 1122-1154 を調査し格組織がさらに進んだ状況でも語順の多様性が見られるとしている。以上から伝統的に格の組織の消失が語順の固定化を引き起こしたという主張は格の影響を強調しすぎていると言える。

第3章 古英語散文における語順決定要因

第2章において格の影響とは無関係に語順の多様性が見られることが判明したが、そこにはどのような要因が働いているであろうか？ 本章では古英語散文における語順決定要因を 'heaviness' の観点から調査した。調査対象は以下の5作品である。

- (1) 初期古英語散文、パーカー年代記 892 年-924 年の部分 (以下 *Parker*)
- (2) 後期古英語散文(11世紀中期)、「アポロニウス物語」の全文(以下 *Apollonius*)
- (3) 後期古英語散文、ピーターバラ年代記 1070 年-1121 年 (以下 Text A)
- (4) 初期中英語散文、ピーターバラ年代記 1122 年-1131 年 (以下 Text B)

(5) 初期中英語散文、ピーターバラ年代記 1122-1131 年 (以下 Text C)

例として後期古英語散文 *Apollonius* における目的語の重さ(長さ)と語順の関係を表 (1) に示す。
 χ^2 検定の数値($\chi^2=70.5$, $df=2$, $p<0.001$)は 'heaviness' が要因であることを示している。

(1) 後期古英語散文 *Apollonius* の主節における目的語の重さと語順

<i>Apo</i>	1 語の O			2 語の O			3 語以上の O			計	
initial	4	(2) ^a	(10%)	2	(1)	(7%)	1	(1%)	7	(2)	(4%)
medial	26	(24)	(60%)	7	(1)	(24%)	0	(0%)	33	(25)	(18%)
final	13	(10)	(30%)	20		(69%)	108	(99%)	141	(10)	(78%)
計	43	(36)	(100%)	29	(1)	(100%)	109	(100%)	181	(37)	(100%)

^a () 内は代名詞の数値

(2) 最初の位置におかれる 1 語の目的語 (O S V 語順)

Scylde ic þolige

Crime I perpetrate

'I perpetrate crime'

(*Apo* 6. 11)

(3) 最終位置におかれる 2 語の目的語 (S V O 語順)

Æfter þisum wordum heo mid modes anrædnesse awrat

After these words she with (of) mind firmness wrote

oðer gewrit

another letter

'After these words, she, with firmness of mind, wrote another letter'

(*Apo* 32. 8-9)

コーパス全体の調査結果を以下の表 (4) に示す。'heaviness' が目的語の位置の決定要因となっているテキストは○で示し、決定要因とならない場合は X で示す。特に従属節に関して初期古英語 *Parker* は O V の固定傾向が、また初期中英語の Text C は V O の固定傾向がみられる。すなわち S O V から S V O に移行する過程で 'heaviness' が語順変化を引き起こすのを助けたものと思われる。

(4) 目的語の位置に与える 'heaviness' の影響

	主節	<i>ond/ac</i> 節	従属節	conjoined 節
<i>Parker</i> (early OE)	○	○	× (O V 傾向)	△ (6% 有意)
<i>Apollonius</i> (late OE)	○	○	○	○
Text A (late OE)	○	○	○	○
Text B (early ME)	○	○	○	× (V O 傾向)
Text C (early ME)	○	○	× (V O 傾向)	× (V O 傾向)

第 4 章 古英語詩における語順決定要因

古英語詩における語順決定要因を本章で調査した。古英語詩の語順研究は数少ないが、大きな原因は同格表現が多いため語順の特定が難しいことによる。したがって本研究では助動詞に着目しその位置を手がかりに詩の語順研究の解明を試みた。古英語散文における法助動詞の語順研究に関して Ohkado (2000, 2001) では 'extra element' (主語 (S)、法助動詞 (M)、本動詞 (V) 以外の要素) の有無が M V / V M の語順決定要因であるとしている。すなわち 'extra element' を含むと M V 語順、含まないと V M 語順となる傾向があると指摘している。

しかしながら古英語詩 *Beowulf* (表 (1) 参照) では 'extra element' に無関係に V M 語順が多く、特に 'extra element' を含む節で V M 語順が多くなっており予想とは異なる結果を示している。

(1) 古英語詩 *Beowulf* における ‘extra element’ の存在の有無と語順

	MV 語順		VM 語順		total
Extra Element=0	2	(40%)	3	(60%)	5
Extra Element=1	4	(9%)	43	(91%)	47
Extra Elements=2 or more	35	(49%)	36	(51%)	71
total	41	(33%)	82	(67%)	123

散文における ‘heaviness’ の要因は多くの研究者(Kohonen 1978, Suzuki 1992a, 1994a, Davis 1997 などが主張している。これを非定形動詞に当てはめると軽いVではVM, 重いVではMVが予想される。しかし実際にはVの音節数が増えるとVMが多く現われ、Vの ‘heaviness’ は要因とはならないことが判明した。次にMとVの相対的重さを調査したが、MがVよりも重い場合はVM, MがVより軽い場合はMVが予想されるが、結果はその逆になっており、これも語順決定要因にはならないことが判明した。さらに韻律論の観点から韻律上のMの重さと語順について調査した結果が表(2)である。

(2) *Beowulf* における法助動詞 (M) の韻律上の重さと語順

	MV 語順		VM 語順		total
Light auxiliaries	14	(56%)	11	(44%)	25
Heavy auxiliaries	27	(28%)	71	(72%)	98
total	41	(33%)	82	(67%)	123

χ^2 乗検定の数値 ($\chi^2 = 7.25$, $df=1$, $p<0.01$) は 1% レベルで有意であり、韻律的重さが語順決定要因となっていることを示している。すなわち軽いMではMVの傾向、重いMではVMの傾向が見られる。しかしながら本動詞の韻律的重さ、また法助動詞と本動詞の相対的重さも要因とはなっていないことが判明した。

以上、散文では ‘extra element’ や ‘heaviness’ の理論がはたらくものの、詩ではうまく当てはまらないため、詩の特徴である韻律の観点から語順決定要因を探ることがより有益であると考えられる。韻律論はリズムの型をいくつ設定するかで議論されてきたが、頭韻の機能に関してはほぼ意見が一致している。そこで以下の分析では頭韻のパターンと語順の関係をM, Vの出現範囲ごとに分類し調査した。頭韻に加わるM, Vを□で示し、M, Vが詩行(第一半行と第二半行からなる)を超えて現われる場合、詩行の区切りは斜線で示す。表(3)は従属節における法助動詞と本動詞の出現範囲、すなわち第一半行内共起、第二半行内共起、同一詩行内共起、異なる行での出現ごとの分布を *Beowulf*, *Andleas*, *Elene* の作品ごとに調査したものである。

表(3) a で示すように第一半行内でM, Vが共起し、かつMのみが頭韻する時は圧倒的にVM語順の傾向が見られ、(3 b) では第二半行内に共起する場合もVのみ頭韻する時(115例中111例) VM語順となる(用例(4a)参照)。一方、半行内で共起する場合でもMVがともに頭韻しないなど他の頭韻パターンの場合にはMV語順となる(用例(4b)参照)。またM, Vが半行を超えて現われる場合、(3) c および(3) d の分布でみられるようにMV語順となり、VM語順は決して現われない(用例4 c 参照)。

(3) 従属節における法助動詞と本動詞の頭韻パターンと語順

(4) a. V M þe þara blissa brucan moton. (And 886)
 who are allowed to enjoy those delights

b. M V (mildum wordum) swa sceal man don! (Beo 1172b)
 as a man should do

c. M V se ðære æðelan sceal ondwyrd agifan
 for þyslicne þreat on meþle (El 545-46)
 who has to give an answer to the noble [lady] in front of such a gathering

(用例中、法助動詞は太字、本動詞は下線で示す。)

第5章 結論

— 149 —

論文審査結果の要旨

自然言語の類型論において、総合型と分析型は基本的な言語パターンを構成するが、英語史上、古英語から中英語へ変化する時期は、格変化語尾の消失と語順の固定化により、総合型から分析型への統語的変化を起こした点で、言語理論的にも興味深い現象が多く見られる段階である。本論文は、前期古英語期から初期中英語期にいたる時期の散文および韻文資料を精査し、古英語における語順決定の要因が、散文と韻文では異なることを明らかにしたもので、全編5章から成る。

第1章は序論である。ここでは、英語史における語順の固定化と統語的な許容範囲内の多様性に関する先行研究をまとめるとともに、情報の未知・既知など、談話的要因を始めとする、従来提案されてきた主要な考え方を紹介、批判している。

第2章では、格の消失が語順の固定化を招いたとする、伝統的に行われてきた説明の妥当性を再検討している。特に、初期古英語から後期古英語に至る各時期に、語尾消失により主語と目的語の格表示が曖昧になった節の内部において、統語的に可能な語順が全て現れる事実を観察している。

第3章では、散文の節内における目的語の生起位置に焦点をあてて、構成素数に基づく言語情報量の多寡が語順決定にはたす役割を論じている。ここでは、文頭、文中、文末の主要な3位置に生じる目的語の重さが、名詞句を構成する構成素の数値により特徴づけられることを明らかにしている。統語的な語順の固定化が確立していない初期古英語から初期中英語までの言語資料の分析において、構成素数に由来する意味量・情報量が語順に関与することを明らかにしたのは、貴重な貢献であり、一般言語理論に対しても意義が大きい。

第4章では、韻文における動詞と法助動詞の生起順序に焦点を合わせた分析を行っている。ここでは、動詞と助動詞の、構成素数や音節数、形態素数に基づく重さによる語順決定は、韻文においてはあてはまらず、代わりに、頭韻のパターンが関与することを指摘している。特に、頭韻が生じている第1および第2半行、同一詩行内、および複数詩行内の4つの言語環境に対応して、動詞と法助動詞が異なるパターンで生起することを明らかにしている。これは、統語論と修辭論に係わる興味ある観察である。

第5章は結論と、今後の展望を述べている。

以上、要するに、本論文は、古英語の散文と韻文における語順が、それぞれ異なる要因に基づいて決定されることを実証し、特に、従来の研究に欠けていた韻文の語順決定における頭韻の重要性を、初めて指摘したものであり、言語学および情報科学の発展に寄与するところが少なくない。

よって、本論文は、博士（情報科学）の学位論文として合格と認める。